

「青い目の人形」プロジェクトの教訓

他地域と交流学习、成功体験が良循環に

横浜市立川和東小学校 出口和生教諭（前・本町小学校）

<プロジェクト以前>

教員になりたての頃、BASICでプログラムを書いて算数の授業を行ったり、パソコン通信を使って宮城県蔵王の小学校と交流を行ったりしていました。しかし、この交流はリアルタイムではなく、自宅に届いたメールを印刷し、教室で代読するという方法でした。その後、横浜市立本町小学校（平成2年から11年まで勤務）の環境を生かしたコンピュータ活用を推進し、始まったばかりのインターネットやTV会議の有効性にも着目し、本町小学校で実践を続けました。

実践の経過、教訓

Webの記述がきっかけに

横浜市立本町小学校で「青い目の人形プロジェクト」を企画したのは、同じ100校プロジェクト参加校であった滋賀県大津市立平野小学校ホームページに青い目の人形についての記載があったことから始まります。その後、埼玉県越谷市立大沢小学校が子どもたちの作ったページを掲載したので、それがきっかけに「一緒にやろう」と交流がはじまったわけです。



最初は、興味を持った学校同士で、数年後にCEC委託の「青い目の人形プロジェクト」として実施し、最大時の参加校は150校にもなったわけですが、プロジェクト参加校は、「国際理解」、「平和」、「学校を愛すること」、「他地域との交流」といった面で教育効果を得られたと思います。

平和の大切さ感じる

「青い目の人形」を取り上げた授業は、山形県や埼玉県の学校では道徳で、富山県など多くの学校では総合的な学習の時間で、本町小学校では社会科でも行われました。

子どもたちは、単にめずらしい人形が校長室に飾られているという認識から脱し、戦争により1万2千体から300体に減ってしまった経緯を調べることで、戦争の悲惨さや平和の大切さを感じ取ることができました。また、戦争状況下でも人形を守った人が自分たちの学校にいて、人形を大切にしていることを誇りに思う子どもが増えたようです。

さらに、他地域の学校と交流することにより、インターネットやテレビ会議を通じて話し合う相手が

「青い目の人形」プロジェクト

平成7年夏、本町小学校のインターネットクラブの子どもたちが各地の小学校の様子を見ていたとき、大津市立平野小学校のホームページが目にとまった。そこには、青い目の人形の情報が載せられていた。そこで、全国で約300体あるはずのうち、本町小にあったはずの1体「ブロッソン」について、子どもたちが調べてみると、「横浜人形の家」ができた16年前に預けられ、以来本町小に一度も戻ってきていないし、傷みがひどく修復のために展示もされていないことがわかった。

本町小の働きかけで、横浜人形の家で「青い目の人形の集い」が開かれ、また、愛知県の小学校の先生が同校のホームページを見て、「青い目の人形グレース」の写真と愛知県で9体の青い目の人形が揃ったときの模様を伝えてくれた。さらに、埼玉県大沢小学校からもメールが届き、「青い目の人形ワーテラ」があることを教えてくれた。

インターネットに接続してわずか1年あまりの間に、4つの小学校の情報がつながり、地域施設「横浜人形の家」との関係も深いものになった。

その後、9年度にはCECの新100校プロジェクトとして「青い目の人形プロジェクト」を実施し、多いときには参加校が150校程度になった。

最初は2校、そして8校でスタートしたプロジェクト。「青い目の人形プロジェクト」は現在も青い目の人形サイトとメーリングリストで継続実施され、学校ホームページに情報を載せている学校も約60校になっている。

<http://www.cec.or.jp/es/E-square/h09jishi/2/01/index.html>

できたこと、情報収集・発信の対象が明確になったことで、子どもたちの目的意識が高まりました。

私自身は、横浜人形の家が学校の近くにあったこともあり、インターネットだけでなく、自分の足で情報収集することの大切さを実感しました。また、情報収集はインターネットだけでなく、多様な方法で行うべきという考えが一層深まりました。

人形掲載校全てにメール

全国で300しかない人形 ということは、情報交換ができる学校も300しかありません。しかも、当時はインターネットに接続されている学校は数えるほどでした。しかし、【夢】は全人形保存校がインターネットに接続され、いつでも情報交換・交流ができること。そこで、ホームページに情報を掲載している学校にはすべて交流依頼を、インターネット接続が確認できた学校には全てメールを送りました。また、それ以外の全学校には、郵便で情報提供の依頼もしました。



歓迎会にてテレビ会議で交流

10年間を振り返って

「夢がまた夢を生む」がICT活用の原動力

本町小学校の教務主任の先生が、教育には「夢」、「情熱」、「実践」の3要素が大切である、と言われましたが私も同感です。「夢」について言えば、私は「教師は子どもに夢を与える必要があり、そのためには教員も夢を持つことが重要」と考えています。情熱を持って夢の実現に取り組み、その結果例えばプロジェクトを成し遂げると、また次の夢が出てくる。そのことが重要ではないでしょうか。

<成功の秘訣>

体制、他の先生への接し方、事前の準備、担当する教員の資質、の4点が特に重要であると思います。順に述べます。

体制

理想的には、校内に実働部隊、アイデアマン、旗振り役の3人がいて、チームが組めると良いと思います。本町小学校でうまくいったのは、このような体制がとれたからです。特に教務主任が旗振り役になってくれたおかげで随分助かりました。

他の先生への接し方

難しいことを初心者（協力してもらおう相手の先生）に要求してはいけないと思います。推進者側がきちんと「お膳立て」をしてから取り組んでもらうことが大切で、あまりスキルのない普通の先生でも簡単に使えるようにすることが重要です。そうすればプロジェクトがうまく回転していき、その成功体験がお互いに良循環になっていきます。

事前の準備

授業の準備段階で、予備の手段を用意しておき、いざという時に備え万全の準備をしておくことが重要です。例えば、検索エンジンを使って子どもたちに検索させる場面で、検索できる子どもとできない子どもが出てきます。そうした場合、検索できない子どもの学習がそこでストップしてしまわないように、代替措置まで用意しておくことが必要です。

教員の資質

ICTを使ってうまく指導できる先生には、一定の資質が必要だと思います。具体的には、「教員としてバランスがとれている」必要があると思います。周囲の状況を把握できることが必要で、周囲の状況に関係なく突っ走ってしまうといった態度は、学校組織では受け入れられません。いくら良いアイデア、技術があっても駄目です。

<今後、ICTを活用した教育を行う上で重要なこと>

優先すべきはネットワーク環境の整備ではないでしょうか。横浜市でも光ファイバーの導入がされ始めましたが、まだ多くの学校は64kbpsの遅い回線環境のところが多く、「重いコンテンツ」活用の妨げになっています。また、コンピュータも早く1人1台になるといいですね。複数人で1台を共有してグループワークを行うと、どうしても使いなれた子どもばかりが使うようになってしまいます。